

## ドレスメーカーキング

東京：鎌倉書房, 1949—1993

「ドレスメーカーキング」の前身は1946（昭和21）年から刊行されていた「ドレスメーカー・パターン・ブック」で、年2回春秋の発行であった。本誌は服飾を勉強する人に役立てばという趣旨で1949年5月に鎌倉書房から創刊された。当時のドレスメーカー女学院の杉野芳子学院長が誌名の名付け親であり、監修を担当し、鎌倉書房社長の長谷川映太郎はドレスメーカー女学院の理事も兼ねていた。当初は隔月刊で68ページの薄いものだったが、洋裁ブームの折、服飾専門雑誌は飛ぶような売行きを示した。

創刊当時の目次には杉野芳子、中原淳一、今和次郎、猪熊弦一郎、中林洋子、そしてドレスメーカー女学院と杉野学園女子短期大学の教員、柳原操、宮崎直江、北爪巳代子、今井絹子、近見弥生、三木晶等の執筆者の名が見られる。洋裁の技術解説のみならず、創刊以来、海外の通信網と特約して、どこよりも早い流行のニュースを紹介しており、それも本誌の特色の一つといえる。1953年5月号にはディオールの版権の承諾を得て、ディオールの筆になる特集「誰でも美しくなる服の上手な着方とデザイン」を発表したが、日本で初めてのこのような試みは、各界から絶賛された。1955年2月号からはINS通信社と特約し、世界のファッションニュースのページを充実させた。また1963年にはフランスの「ル・ジャルダン・デ・モード」誌と提携し、パリのおしゃれが誌面に積極的に盛り込まれた。1966年には「WWD」と独占契約を結び、日本の服飾関係者の中で大いに注目された。その2年後には本誌パリ支局を設け、資料収集および現地取材に力を入れるようになった。

1950年頃から日本の服飾界にも活発な動きが見受けられるようになる。日本ファッション界のリーダーであり服飾教育の先駆者であった杉野芳子は服飾用語、色名、生地などの事典シリーズの特集を始め、服飾知識の普及に努めた。そして、1956年5月号に初めて別冊付録として「服飾用語の事典」を付け、各界から注目された。簡便な体裁が好評だったため1970年、ハンディーな小型サイズの単行本『図解服飾用語事典』を出版した。同書はこのあと数回の増補・改訂が試みられ現在も利用されている。このほか別冊付録は1957年3月号の「ドレスメーカーキング・スタイル・ブック」、1960年5月号の「ドレメ式裁ち方のハンドブック」などがあり、読者が競って求めたという。また、1962



創刊号（1949年4/5月）表紙

年1月号から杉野芳子執筆の「デザイン講座」が掲載されていたが、1967年に単行本『服飾デザイン』として出版され、ベストセラーとなった。創刊30周年記念号となる1979年6月号では洋裁の基礎と美しく仕立てるコツを解説した「ドレメ式服づくり便利帳」を別冊付録とした。

当初隔月刊であった本誌は、1953年5月号から月刊誌になる。そして杉野芳子は欧米に追随するだけでなく日本のファッション界をリードし国際的に発信もしていく。1957年1月号からの表紙はドレスを杉野芳子がデザイン、創刊以来の外国人モデルを日本人モデルに切り替え、1961年には東南アジアで海外版ドレスメーカーを刊行したことなどがその現れであろう。

洋裁実用誌として親しまれてきた本誌は1979年には30周年を迎えて10月号から大判化した。時代に合ったファッション誌として服作りだけでなく幅広いファッションが楽しめる、ビジュアルで夢に満ちた、密度の高い誌面にするための変更である。1989年1月号では、創刊500号を記念して表紙のロゴタイプを「DRESS MAKING」としたが、1991年1月号には再び「ドレスメーカー」とカタカナに変更された。

60年代の終わりから70年代の初めにミニスカート、パンタロンなどが出回って既製服が一般的になり、「縫うより買う」時代へと移行していった。鎌倉書房の看板雑誌として1970年前後には販売部数45万部だった本誌は、新しいファッション雑誌へ読者が移るにつれ部数は減り、1993年5月号をもって終刊になった。

(尾崎恵子)



1966年11月号表紙